

## 関西学院大学 研究成果報告

2024年 5月 31日

関西学院 院長殿

所属：神学部  
職名：教授  
氏名：加納和寛

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国：ドイツ連邦共和国） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	アドルフ・フォン・ハルナック研究 －非教義的キリスト教の思想とその展開－
研究実施場所	ドイツ連邦共和国ヴッパータール大学人文学部
研究期間	2023年 4月 1日 ～ 2024年 3月 31日（12ヶ月）

## ◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

アドルフ・フォン・ハルナック(1851-1930)は一般に19-20世紀転換期を代表する教会史家とされている。その目論見は、前世代に確立されていたヨハネス・フォン・ホフマン(1810-77)の救済史観を否定して、カーライルの人格的史観を導入しつつ、ゲーテ的な非目的論的世界観によって教義史を再構築することであった。ただしこれらの前提は本人によって詳述されておらず、他者の分析によってのみ提示されている。その神学の輪郭は第三者によって「非教義的キリスト教(Undogmatisches Christentum)」と称される。従来報告者は定説に則ってこの観点からハルナックとの対話を遂行してきた。しかし今回の研究期間中にハルナック自身はこの語を別の神学的潮流を指すために用いており、しかもその意味内容はこれまで報告者が意図していたものとは大きく異なっていたことを発見したため、ハルナックを非教義的キリスト教の代表的存在と見做すことの是非を問わざるを得なくなった。その意味するところである伝統的キリスト教教義および主要教説の相対化、異説(異端)との積極的対話、信仰の個人化並びに内面化についても改めてその位相を問う方向性を見出したことは本研究期間における成果の一つである。

他方でハルナックが自由主義神学の泰斗として教会当局から批判されつつも、敬虔主義等の非教會的勢力からはむしろ歓迎の意を示されていた理由は、ひとえに正典成立後の諸教義を背景に斥けてイエスの福音への回帰を唱えたからに他ならない。師アルプレヒト・リッチェルがブルジョア市民社会への迎合と目される集団性の強い神学体系を提示したのに対し、ハルナックのそれは実質的に個人主義の昂揚に棹さす非教會的神学と理解され、近代主義を受容するキリスト者と「聖書的」敬虔主義者双方からの支持を得るといって、一見不可解な地位にあった。

この同床異夢を解く切り口の一つとして聖霊理解が挙げられる。動的・躍動的な聖霊理解は4世紀以降、

西方教会では一貫して抑制の下にあった。それはハルナックが明らかにしたところの、古代における異端論争の結果に他ならない。これまではキリスト論がその要点とされてきたが、キリスト論は同時に三位一体論と密接に関連し、必然的に聖霊について論じることを免れない。特にモンタノス派は個人の靈感・道徳的勲功・終末における救済を強調したが、これらを成就へと導くのは聖霊以外にあり得ない。それゆえ正統教会は異端排斥に伴って個人への聖霊の参与に慎重となり、この姿勢はそのまま宗教改革者に継承された。なぜなら宗教改革急進派、とりわけトマス・ミュンツァーは当にこの点においてモンタノス派と重なる主張をもとに農民戦争を率いたからである。

プロテスタンティズムへの近代主義の流入は、伝統的教義の相対化と信仰の人間化においてそれ以前とは一線を画す神学を確立したことに相違ないが、聖霊の看過についてはむしろ継承・発展を促した。リッテルによるカントの「目的の王国」論に刺激を受けた、神の国の漸進的かつ此岸的な完成の主張には聖霊の余地がない。地上における神の国を天来の神の国へと近づけるのは人間理性であって、聖霊の働きではないからである。続くハルナックの福音回帰と内面的な神の国の到来はイエスとの直接的な個人的邂逅を説く言説にも聖霊は要請されない。父なる神と子なるキリストおよび神と人とを結ぶ愛の絆である聖霊（アウグスティヌス）は、即今・当処に神の国が到来し、靈魂の奥底で神的一致が成就するのであれば不要だからである。

この見解に至ったのは、本研究期間中にフリードリヒ・リッテルマイアーの思想に触れたことが大きい。リッテルマイアーはハルナックの弟子だったがルードルフ・シュタイナーの人智学に共鳴しドイツ福音主義教会を去って「キリスト者共同体（Christengemeinschaft）」を創設している。その神学はシュタイナーの靈的宇宙論と直観主義からキリスト教の使信を再解釈したものと思われる。にもかかわらずリッテルマイアーの神学には聖霊論がほぼ脱落している。人間は高度な靈的存在として真理を直観できることが人智学の前提である。つまり真理直観を援助する第三者としての靈的存在は必要ない。そもそも神もイエスも靈的存在であることが強調されるため、神と人との断絶に橋を架ける靈的仲介者も要請されない。伝統的キリスト教とは大幅に異なる宇宙観に立脚しているにもかかわらず、驚くべきことにハルナックとリッテルマイアーがそれぞれ提示する世界構図は相似形を為す。「古代文化においても近代文化においても、合理主義は神秘主義の子である」（ティリッヒ）という洞察はとりわけ両者の比較考察において当を得ている。聖霊理解とそれに基づくシェーマこそがその指標に他ならない。リッテルマイアーの神学は単純なオカルティズムではない。仲介者のない神的邂逅（人間聖化）の内的直観を靈的宇宙論の構図において人間学的（ただし霊を焦点として）に描いたものであって、これはハルナックにおける神の国の個人的・内的到来と比較した場合、ベクトルのみが逆方向である以外は、神的領域と人間領域との位相はほぼ同一であると言える。

ハルナックとリッテルマイアーの聖霊に関する比較考察は、ハルナックとボンヘッファーの比較考察を補強する有用な材料と言える。ボンヘッファーは聖霊を信仰の靈感と力の源であり、他者との交流・社会正義の実現・平和の成就に不可欠な仲介者であると考えていた。その神学は「非宗教的キリスト教」と呼ばれるが、これを単純に社会的・合理的宗教理解であるとして従前の「宗教的キリスト教」と対置させるのは拙速であり、逆に従前のキリスト教を過度に合理的であったとして、ボンヘッファーの思想を真の意味で宗教的すなわち靈的であると対抗的に位置づけるのも粗雑な結論である。ボンヘッファーが超克しようとしたハルナックが提示した構図から、リッテルマイアーのような「靈的」キリスト教を構築することは容易だからである。両者の決定的な差異はそれぞれの神学プログラムにおける聖霊の位相に求められなければならない。

以上のように聖霊論を中心とした近現代の神学の再読・再構築の糸口を見出すことができたのは本研究期間における収穫の一つであったが、これらを元にした具体的な成果物の作成に至らなかったことを反省したい。他方でこれらの研究課題と並行して、英語圏における聖霊重視運動の一つと見做し得るメソジスト運動に関する書物William J. Abraham, *Methodism: A Very Short Introduction* (Oxford University Press: 2019)の訳業を完成させることができた。訳書は2024年度中に刊行予定である。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間の大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。